関係機関と連携し農業経営の発展をめざす

――石川県 JA金沢市



農作業中の事故により大きなけがを負った担い手。再起をめざしたいという
彼の熱い思いに応えて、共に歩きだしたTAC（地域農業の担い手に出向く担当者）がいる。
前に進もうにも確かな方法がなく、手探りの状況のなか、いかに夢を現実のものに変えていったのか。
カギは「連携」と「相談」にあった。

福地大亮＝写真　photo by Daisuke Fukuchi　JA全農TAC・営農支援課＝企画協力

「山口朝史さんが直売所の店長だったときには、わたしが作った洋ナシ『ル レクチエ』のPOPを作って、お客にその価値をPRしてくれたんですよ」

果樹農家の東賢二さん（41）が二人の関係を振り返ると、二〇二二年度からTACを務めるJA金沢市アグリセンター東部崎浦所長代理の山口朝史さん（44）はこう応じた。

「約一二年間、管内の直売所で勤めてきたので、TACになったばかりの頃は不安が大きくて。でも、年齢の近い東さんが気にかけてくれて助かりました」

山口さんがTACに就いた年。選果場が立て込む時期だった。東さんが作業中に事故に遭い、下半身が不自由な状態になった。

「現場を離れているあいだ、兄が会社を辞めて農業経営に加わってくれることになりました。両親や兄夫婦、わたしたち家族の生計をどう立てていくか、新たに付加価値を持たせることはできないかと考えていました」

思案したすえに導き出したのは、障害のある人でも楽しく利用できる観光農園だった。

写真左から東さん、JA金沢市の山口さん。東さんは山口さんのことを「農家に寄り添ってくれる人」と評する。東さんが乗る農機が「ビーグル」で、座席が上下するので、高いところでも座ったまま作業できる

「入院していたとき、まわりの仲間と話していて、『車いすだと家族と行ける場所がショッピングモールなどに限られている』と知って。それならわたしが農業という非日常の体験を提供しようと思ったのです」

果樹園の再起をめざしたい。約二年間の療養を経た東さんから、そう聞いた山口さんは、「わたしのほうが元気をもらえました」と、要望を受け止めた。二人が新たに描いた夢。しかし、実現するための道筋は、そのときはまだ見通せていなかった。

前例がないならつくろう

「やっぱりこれがあると、作業に至るまでがスムーズですよ」

自身のナシ園地の前で車いすから作業用昇降車・ビークルに乗り換えた東さんがそう話す。少しでも早く現場に戻りたいと希望していた東さんに、山口さんが地域の高齢農家が利用していたことを思い出し、提案した農機だ。しかしながら、高価である。費用負担を軽減するためにどうしたらいいか、同JAでTAC活動を統括する担い手支援室室長の押田哲男さん（53）をはじめ、県の農林事務所、市役所などに相談した。見いだした打開策は、県の補助事業「いしかわ里山振興ファンド」の活用だった。観光農園という夢を具体化することで、中山間地の活性化という事業の要件を満たせないかと考えたのだ。

「ホワイトボードを前にみんなで話し合っていると、どんどん話が広がりました」（山口さん）

関係機関との連携により作成した計画を二四年に申請。前例が少なかったため、観光農園の調査費用という名目で事業活動費を得ることができた。その後の一年間は情報収集や開園準備に充て、二五年九月下旬には、障害者団体の協力を得て、農業体験を実験的に実施した。

「想定より人手が必要だったり、簡素化できる部分があったり、実施してみてみえたものがありました」（東さん）

地道な経営調査が実り、二六年からは補助事業に正式に採択された。木漏れ日の下、「ようやく形がみえてきた」と語る二人の目には、光が宿っていた。



リンゴ、モモ、ナシ、洋ナシなどの果樹を2haで生産してきた東さん。現在は、主な農作業を兄が担当し、東さんが技術的なサポートを行う



2025年9月に実験的に開いた農業体験の様子
（写真提供／JA金沢市）

経験・知識・関係の積み重ねこそが財産

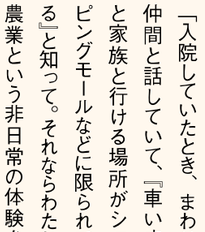
JA金沢市でTAC体制が始動したのは2013年のこと。担い手からの要望が高度化したことが理由だ。押田さんは、「組合員を訪問して、要望を聞くという点は、TACが発足する前から変わりません。求められる内容に応じて、活動が変化するのです。総合事業を行うJAには、課題解決のヒントがいろんな事業・部署に散らばっています。発足から10年以上たち、ヒントを見つける力が磨かれてきて、情報も入りやすくなりました」と語る。

一人で抱え込まずに課題を共有し合う

「知ったかぶりするのは、よくないと思っていて」と、話すのは東さん。わからないことがあれば、他の人に助けを求めるようにしてきたという。他方、山口さんも「進め方などに悩むことがあれば、押田さんに相談し、道筋をつけるようにしてきました」と話す。困ったら相談するという謙虚な姿勢が、関係機関を巻き込み、課題を解決するうえでの大きな原動力となった。

JA金沢市

石川県のほぼ中心に位置し、中山間地、平坦地、河北潟干拓地、砂丘地、市街化地区と、性格の異なる5つの地域で農業が営まれている。主なブランド農産物として、昭和初期以前から栽培されている「加賀野菜」15品目や「金沢そだち」5品目がある。兼任TAC・専任TAC（担い手支援室）の計26人を配置。



「担い手からの要望には、もう一歩踏み込んでお応えしたいと、思っています。いつでも相談できる、農家にとっていちばん近くの応援者でありたい」と山口さん



JA金沢市担い手支援室室長を務める押田さん。「担い手のみなさんに困り事があれば、わたしたちTACを育てるような気持ちで、まずは相談してもらいたい。解決には時間がかかるものもありますが、いっしょに課題に立ち向かいます」



どんな課題にも粘り強く取り組む!



イラストはJA全農TAC・営農支援課と地上編集部によるコラボキャラクター「TACマン」

TACについての詳しい情報は、JA全農HPのTAC紹介ページまで（https://www.zennoh.or.jp/tac/）

JA金沢市のウェブサイト

［じっくり話し合おう］日々の営農で負担に感じていることはありませんか。TACに相談する機会を設けてみよう

担い手とTAC

このコーナーでは、地域の担い手とTACが"未来の農業"のために取り組む活動を、全国のみなさんにお届けします